

●プロジェクトマネジメント～事業の動かし方、事始め～

＜プロジェクトを知る＞

1. プロジェクトには「始め」と「終わり」が必ずある。
2. プロジェクトには「受益者」が必ず存在する。
3. リスク（成功の障壁となる事項）は必ず発生する。
4. プロジェクトは「資源を消費」する。
5. プロジェクトには明確な「(財務) 目標」がある。

＜プロジェクトの失敗原因＞

1. リーダーシップの欠如 【自覚ない先導役、複数の先導役】
2. 曖昧な目標の設定 【解釈の差異が個々に生じた】
3. 不明確な予算の計上 【適当な試算・ずさんな管理】
4. 実施体制の不備 【ヒト・モノ・カネの過不足】
5. 実現不可能なプロジェクト【時期や規模、収支の検討違い】

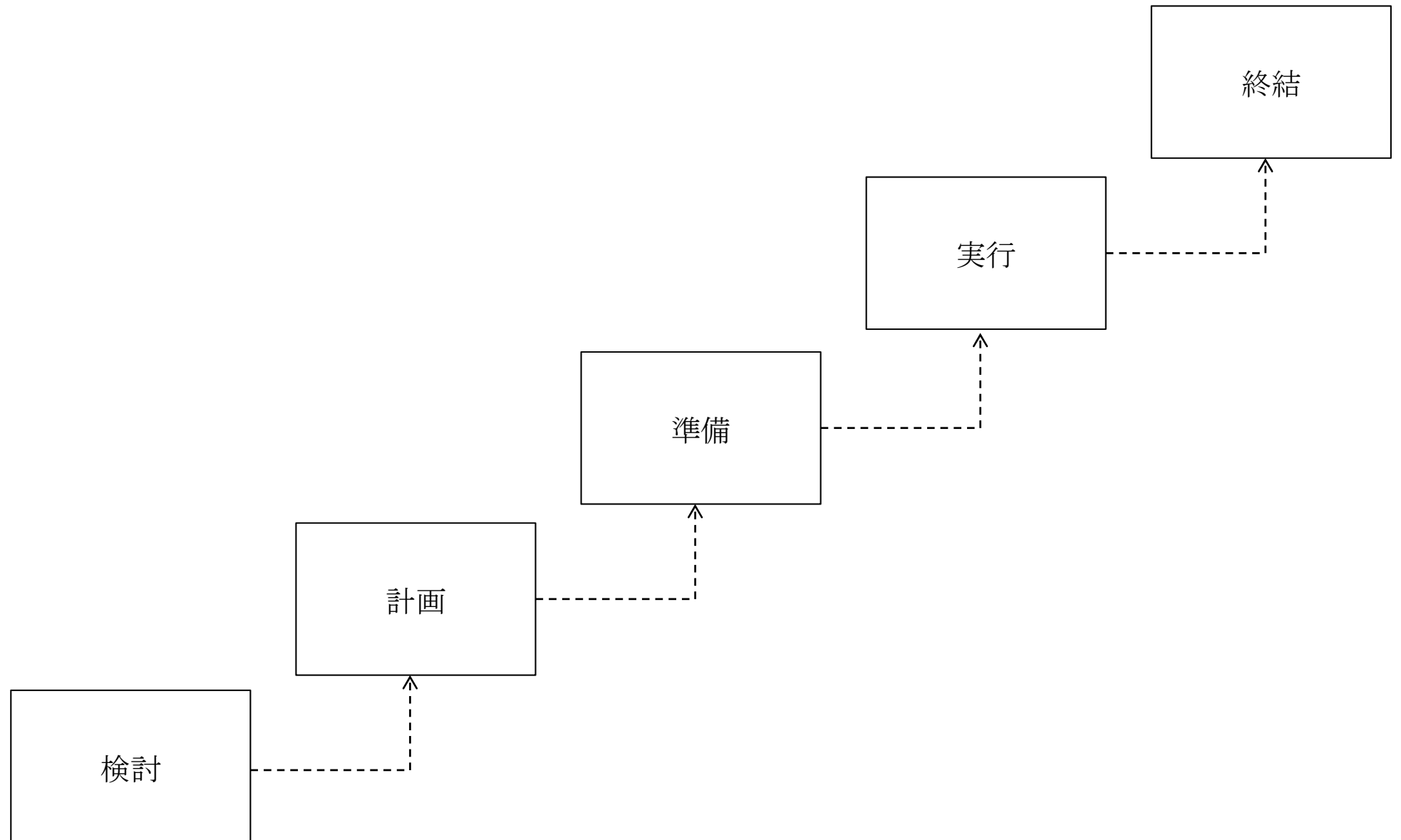
＜リスクへの対応策＞

1. 【回避】除去するために資源を必要としない範囲で処置。
→自分が動けば回避できるなど、ごく軽度な対応。
2. 【軽減】発生確率と影響を最小限にするために具体的な処置。
→「先延ばし」「延長」などで影響度を最大限に下げる。
3. 【転嫁】リスクの一部、全てを関係者に転換する。
→第三者に被ってもらう。保険に入るなど。
4. 【受容】処置をせずに、リスク発生の結果を受け入れる。
→発生する事項を受け止める。できる最善策をとる。

＜プロジェクトを成功させる7つの意識＞

1. 【目的を常に確認】差異はないか、忘れてないか、違ってないか再確認。
2. 【主体性の発揮】業務を他人任せはしてないか？自発的に行動！
3. 【残務作業量で判断】的確な状況は、達成量でなく残務量で判断。
4. 【トラブルは起こる】発生時は状況を把握し、被害を最小限に。
5. 【受益者の立場で判断】受益者や協力者が望む判断か？
6. 【客観的に物事を分析】感情や勢いではなく事実から状況を判断。
7. 【改善へ常に変化】プロジェクトは成功へ常に変化。心に余裕を。

●プロジェクトのライフサイクル。



あなたが体験したプロジェクトについて教えてください。

	＜満足した・学びの多かったプロジェクト＞	＜納得できなかった・反省点の多かったプロジェクト＞
リーダーは誰でしたか？	自分 他者	自分 他者
どんなプロジェクトですか？		
あなたはどんな役目・立場で参加しましたか？		
「満足」又は「不満足」と感じた理由は何ですか？		
プロジェクトは、どんな「成果」「結果」が受益者にもたらされましたか？		
プロジェクトを通して学んだ、感じたことはなんですか？		

あなたが体験したプロジェクトについて教えてください。（記入例）

	＜満足した・学びの多かったプロジェクト＞	＜納得できなかった・反省点の多かったプロジェクト＞
リーダーは誰でしたか？	自分 他者	自分 他者
どんなプロジェクトですか？	愛媛県で撮影希望の映画・映像制作者と愛媛県の「橋渡し役」を担い、シーンに適している撮影場所、撮影の段取りなど、コーディネートするプロジェクト。	市内４０箇所です市街劇をしたプロジェクト。東京から役者や関係者が５０名ほど訪れ、市民も演者やスタッフとして参加した４ヵ月間、予算１０００万円のプロジェクト。
あなたはどんな役目・立場で参加しましたか？	愛媛県の窓口として、撮影候補地を見つける他、制作側へ撮影場所の提案、制作側のリクエストを精査し、県内の協力者へ相談、依頼。	事務局として運営管理にあたっていたが、実務リーダー不在による責任の所在が不明となり、市民側からの要望もあり急きょリーダー役を担い、実務を支えた。
「満足」又は「不満足」と感じた理由は何ですか？	（満足） 作品を通した愛媛県のPRが実現。エンドクレジットの掲載。 （不満足） 提案した情報が採用されるとは限らない「もどかしさ」。	（不満足） 異なる立場でのプロジェクト推進が抱える「弱さ」が露呈した。決断の曖昧さ、玉虫色の判断、責任の所在不明、リーダーシップの欠如、突如現れる複数のリーダーなど。
プロジェクトは、どんな「成果」「結果」が受益者にもたらされましたか？	「世界の中心で、愛をさけぶ」「HERO」「坂の上の雲」「真夏の方程式」など、４００本以上の作品を通し、愛媛県をPRできた。 また、本プロジェクトの課題改善などを目的に、「いよこころザシ大学」が誕生した。	街中で突如演じられる「市街劇という非日常」に接していただいた。 観客が期待していた演出ができず、演者・観客双方に不完全燃焼感が残った。 成果・効果が限定的になってしまった。
プロジェクトを通して学んだ、感じたことはなんですか？	多様な立場ながら目的が一緒ならば資源を出しあうこと、リーダーがしっかりしていれば皆がついていくこと。 撮影隊にとっては幾度と経験した撮影でも、地域にとっては一度きりなため、撮影によって地域が疲弊しない姿勢で取り組むべきと感じた。	反省点が多いプロジェクトは評価機会にて、問題と問題の背景をステークホルダーで共有し、改善策まですべきではできなかった。 規模、内容、クオリティ、集客力、体制など全てにおいて中途半端だった。